
黒髪の女と客観的な男

夜一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒髪の女と客観的な男

【Nコード】

N8903Q

【作者名】

夜一

【あらすじ】

ある冬の日に偶然目があつた。
それが僕の物語のスタートだ。

キャラクター紹介

逢坂 一夜

あいさか かずや

性別 男

性格 温厚

体格 平均的

身長 175

体重 60

特技 早寝、料理

一応、主人公でも影薄いかも。

坂上 智絵

さかがみ ともえ

性別 女

性格 明るい

体格 少し細め

身長 163

体重 わからない

特技 速読

ヒロインの予定

一夜が好きだか気が付いてもらえない可哀相な人

八代 新

やしろ しん

性別 男

性格 明るく気分屋

体格 細マッチョ

身長 178

体重 78

特技 運動全般

運動部の助っ人や何でも屋みたいな事をしている。
一夜の前で智絵を弄るのが好き。

プロローグ

雑踏の中を僕は歩く。

暖かい日差しの中。

僕は考え事をしながら家に向かっていた。

そんな春の爽やかな風が吹くある日。

僕は初めて君に出会った。少女はとても綺麗な黒髪を風に踊らしながら堂々と道を歩いていた。

（綺麗な黒髪だな。）

僕は素直にそう思った。

少女はこちらに気が付き僕を見て驚くような顔をしたが直ぐに笑顔になるとこちらに手を振って歩き出してしまった。

（今の子華奢な体つきにしては手足がすらりと長くて長いまつげと大きくて吸い込まれそうな黒眼が可愛かったけど：

存在感が少し薄いような：でも、可愛かったな。

でもあの子は何で僕に手を振ったんだろう？

きつと見知ってる人に似ていたのかな）

この時僕は単純に考え過ぎていた。

僕の人生はこの女の子と出会った時から歯車の様にくるくると廻っていたのだろう。

止まらない歯車のように。

一話目？

昼休み。

僕は背筋を伸ばしながら窓の外を眺めていた。

晴れ渡った春の空は暖かく眠りを誘う空だった。

「一夜、じじくさいんじゃないの。」

隣から明るい感じの声をした幼なじみが椅子から立ち上がりそう言った。

上坂智絵

（かみさか　ともえ）。

小学校からの友達で

基本明るいかわいい感じの子、男子の美人ランキングでも上位にいつも食い込んでいる。

「そうかな？」

と僕は少し笑って。

「日差しが気持ちいから、眠くなって。」

「確かに一夜の席は日差しがよく当たるからね。」

と楽しそうに智絵は、

「明後日は行けそう？」と聞いてきた。

「明後日？…あ、大丈夫だよ！一緒に買い物に行く約束だろ」それを言うと智絵は笑顔になって

「そっか、よかった…覚えててくれた。」

と笑っている。

「逢坂　一夜君は智絵君とデートかな？」

後ろからもう一人の幼なじみがにやにやと笑いながら寄ってきた。

八代　新

（やしろ　しん）

中学の時に偶然知り合いそれ以来親友のような感じの付き合いだ。

「デートじゃないよ。ただ二人で買い物に行くだけだよ。」

すると新は

「世間ではそれをデートと言うんだよ。」

と僕と智絵に言うとはやすように

「デートだデート」

僕は呆れて新を見ているとさっきから智絵が話に参加してない事に気が付いて智絵を見ると顔をほんのりと朱くした智絵がいた。

智絵は

「デート…一夜とデート…」と呟いていた。

「どうしたの智絵？」

心配になったので声をかけると智絵は飛び上がるじゃないかと思うぐらいに驚いていた。

すると新が

「智絵、残念だな。一夜は超が付く鈍感だからな。」

「そうなんだよね…」と二人から諦めたような責めているような視線を感じた昼休みだった。

その後、三人で購買部に行った。

僕と新はおにぎりを智絵は牛乳を買う為に。

廊下を歩きながら、

「一夜は幸せだな、智絵みたいな可愛い幼なじみがいて。」

と新がからかうような声でそういうと。

僕は、

「確かに智絵は可愛いから自慢出来るね。この子は僕の幼なじみです。てね」

と智絵の方を見ると、智絵は壁側で深いため息をついていて新は黙って智絵を見ていたが、

「はあ」と首を振って僕の方に顔を向けて

「俺にも来ないかな〜春。」

智絵は

「もっと積極的にアプローチしないと解んないのかな…」と呟いて

いた。

昼飯を三人で食べた後、僕は図書室に向かった。借りていた本を返す為に。僕は自分で本を買う事は滅多にないだろう。

たまに勉強の資料として図書室に無い時に買う位だ。

返却を終え、時間が有ったので書架の間を見て回る。

本棚の中程まで見て回ると一冊の青いカバーの文庫を見つけた。

僕は何となく手に取ると読み始めた。

話しの粗筋は、交差点で偶然に目があった。二人の少年と少女の悲しい話だった。

二話目？

『…校…残って…る生徒は帰宅してください。繰り返します。校内に……。』

ふと目を上げると外は暗くなっていた。

（やば…本に集中し過ぎた。早く帰らないと。）

読んでいた本を借りて正面玄関に行くと外は真っ暗だった。

僕はいつもの道をいつもより速く歩く。

（お腹減ったな。早く帰ってご飯作らないと）

数分歩いていつもの大通りに出る。

そこで僕は例の彼女にあった。

彼女はまた反対の通りを歩いていた。

僕は彼女から目が離せなかった。

「綺麗だ。」

無意識に口に出ていた。

僕は気が付くと彼女を追っていた。

彼女を追いかけて隣町に行く橋に着いてしまった。

車の通りが激しく時折、彼女を見失う。

また見失ってしまった。

（何やってんだろ僕は、これじゃストーカーじゃないか。帰ろう。）

ゆっくりと振り返り歩き出した。

「何やってんの。一夜。」「智絵。」

歩き出そうとした先に幼なじみがいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8903q/>

黒髪の女と客観的な男

2011年11月14日10時38分発行